

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：34534

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23660053

研究課題名(和文)人工股関節再置換術患者の実態調査

研究課題名(英文)Survey of patients undergoing hip replacement surgery

研究代表者

山本 多香子(YAMAMOTO, TAKAKO)

近大姫路大学・看護学部・准教授

研究者番号：50442257

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：退院後1～5年の87名(再置換術21名、初回人工股関節全置換術43名、両側人工股関節置換術23名)に調査協力を得て、属性(年齢、性別、身長、体重、術式、退院後の年数)、痛み、運動習慣・内容、家族構成、住居環境、股関節保護に対する意識(5段階評価)、自己記入式疾患特異的QOL尺度Oxford Hip Score日本語版の測定した。再置換術患者は、日常で股関節に痛みがあったが突然感じる痛みはなかった。再置換術患者は独居が多く、家事活動は自分で行っていた。転倒の意識は高かったが、転倒を経験した者も多かった。体重増加の意識は低くBMI値は高かった。買い物をして一人でできないことからQOL評価は低かった。

研究成果の概要(英文)：Research collaborators in 87, was a patient of 1-5 years after discharge. 21 persons was hip prosthesis revision surgery. Consciousness (years age, gender, height, weight, type of operation, post-discharge), pain, exercise habits and content, family structure, home environment, to the hip joint protection (out of 5), self - disease-specific QOL scale attribute I was subjected to measurement of Oxford Hip Score Japanese version. Patients who underwent replacement surgery, there was pain in the hip joint that was subject to revision, QOL assessment was low. However, the pain, there was not hurt bad like feel suddenly. Patients who underwent revision surgery, had more living alone. Without having to ask the helper, it was doing on their own housework activities. Consciousness to be careful to fall in everyday life was high, experience that you fall there were many. Awareness of weight gain is low. QOL assessment was low from the fact that it is not possible to think of my shopping alone.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：人工股関節 再置換術後患者 実態調査

1. 研究開始当初の背景

変形性股関節症患者のニーズは疼痛軽減、日常生活活動や歩行障害の改善及び向上がほとんどであり、人工股関節全置換術後では疼痛軽減と早期の歩行獲得が重視されている。1990年から1997年において人工股関節全置換術を受けた患者では、20年を経過しても人工股関節を再置換せずに生活している。そのことから、人工股関節は改良されるとともに今後の耐用年数の増加することが予測される。しかしながら、人工股関節の再置換術が必要になるのは、人工股関節のゆるみ、摩耗、骨溶解、転倒による人工股関節周辺の骨折、股関節に強い痛み症状の出現、あるいは痛み症状がなくても検査で異常を認められた場合には再置換術の適用となる。

人工股関節の再置換術は、手術手技が難しく、出血や術後感染の危険性や、初回の手術を受けた年齢よりも高くなる(例えば、初回の人工股関節全置換術を受けた年齢が40歳代後半~70歳代であれば、再置換術を受ける年齢は60~80歳代になる)ことから、患者の受ける侵襲は大きいことが考えられる。とはいえ、患者の呼吸機能や循環機能といった全身状態が安定していれば人工股関節の再置換術を受けることは可能であり、患者は、自分自身のより高いQOLを獲得するために、人工股関節再置換術を選択すると思われる。

厚生労働省の調査によると、股関節や膝関節に障害をもつ関節症の患者数は、平成17年度21万8300人に推計され、増加していることが報告されている(厚生労働省、2005)。平成23年簡易生命表によると、男性の平均寿命は79.44年、女性の平均寿命は85.90年である。平均寿命が長くなるということは、人工股関節の耐用年数は増えても、今後いつそう再置換術を受ける患者の増加が推測される。人工股関節再置換術患者に関する研究は、再置換のリスクに関連する要因(佐藤、2009)が明らかにされているが、人工股関節

再置換を受けた患者の退院後の痛みと生活状況に関する研究はほとんどみあたらない。

2. 研究の目的

変形性股関節症で診断を受けた初回人工股関節全置換術、両側人工股関節置換術、人工股関節再置換術を受けた退院後1~5年の患者に対して、痛みと生活状況に関する実態とQOLを明らかにする。

3. 研究の方法

1) 調査期間

2011年11月~2014年3月

2) 調査協力者

調査協力者は、初回人工股関節全置換術(以下、初回THA)、両側人工股関節置換術(以下、両側THA)、人工股関節再置換術(以下、再置換術)を受け、A病院整形外科に通院している退院後1~5年を経過した患者であった。選定の基準は、話しの理解や意思を伝えることができ、変形性股関節症の診断でリウマチに罹患していない患者とした。調査協力者の募集は、A病院整形外科外来に設置した「調査協力者募集」文書を用いて行った。研究者は、連絡のあった調査協力予定者に研究の趣旨、方法、倫理的配慮を文書と口頭にて説明し同意の意思を確認できた、選定の基準に合った患者を調査協力者とした。選定の基準に合わなかった調査協力予定者に対しては、研究の応募に対する感謝を申し上げ、選定基準に合わなかった理由と応募に際して知りえた情報は漏らさないことを説明した。

3) 調査方法

調査は、第三者の目に触れない個室を準備し、自作の調査用紙を用いて調査協力者に聞き取りを行った。調査の内容は、基本属性(年齢、性別、BMI、術式、退院後の年数)、痛みの状況(有無、部位)、運動習慣の有無、生活・住宅状況(家族状況、サポートの有無、手すりの設置場所、椅子中心の生活様式状況)、生活動作や体重管理に対する意識の程

度を5件法で求め、「非常に気をつける:5点」「気をつける:4点」「どちらともいえない:3点」「気をつけていない:2点」「全く気をつけていない:1点」とする点数化を行った。記入式疾患特異的QOL尺度Oxford Hip Score (OHS)日本語版を用いてQOLを測定した。

4)分析方法

調査協力者の術式により再置換術・初回THA・両側THAの3群に分け、項目別に平均値、標準偏差、最大値、最小値をみた。統計処理には、IBM SPSS Statics20を使用した。

5)倫理的配慮

調査協力者には、研究の目的および研究内容を示し、研究協力は自由意志であること、研究への協力は途中で辞退することもできること、協力を拒否しても今後の診療や看護には一切影響しないこと、個人が特定されないよう全て統計処理すること、データは本研究以外の目的で使用しないこと、研究結果を学会等で公表することなどについて文書を用いて説明し、同意書への署名をもって研究協力への承諾を得た。なお、本研究は近大姫路大学研究倫理委員会および調査病院倫理委員会の承認を得て実施した。

4.研究成果

1)調査協力者の概要

再調査協力者は87名であり、再置換術患者21名、初回THA患者43名、両側THA患者23名だった。再置換術・初回THA・両側THAの術式別にした退院後1~5年の人数(%)を表1に示した。

表1 術式別の退院後1~5年の人数

退院後年数	1~2年	2~3年	3~4年	4~5年	5年
再置換術:人数(%)	5(23.8)	3(14.3)	4(19)	4(19)	5(23.8)
初回THA:人数(%)	13(30.2)	9(20.9)	5(11.6)	1(2.3)	15(34.9)
両側THA:人数(%)	5(21.7)	8(34.8)	1(4.3)	7(30.4)	2(8.7)

性別は男性9名、女性78名であり、どの術式においても女性が多かったが、再置換術を受けた患者では男性割合は他の術式に比べて高く6名(29%)だった。平均年齢では、再置換術患者は両側THA患者より低く67.3(SD±11.9)歳だった。再置換術患者は65歳未満の占める割合が高かった。(図1)

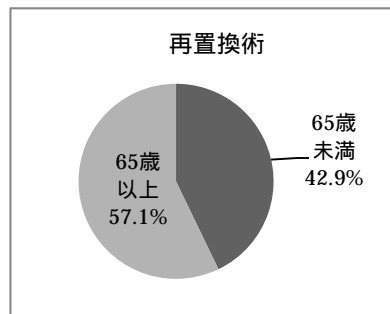


図1 65歳未満の占める割合(再置換術)

2)痛みと生活状況

股関節に痛みがある患者は、初回THA患者に多く27名(62.8%)であり、手術を受けていない反対側の股関節に痛みがあった。再置換術患者では股関節に痛みがある患者は13名(61.9%)であり、再置換手術を受けた側の股関節に痛みがあった。両側THA患者は股関節に痛みがある患者は少なく3名(13%)だった。股関節以外に痛みがある患者は初回THA患者に多く29名(67.4%)であり『腰部』、『膝部』に痛みがあった。運動の習慣がある人が多かったのは、両側THAを受けた患者だった。運動の習慣が少ないあるいは全くなかった人は、初回THA患者に多かった。運動内容は、再置換術・初回THA・両側THA患者に共通して「散歩」が多かった。「水中歩行」は両側THAを受けた患者に多かった。

家族構成では、「独居」の回答率は再置換術患者が高く33.3%(7名)であり、「同居」は低かった。「同居」の構成人員は『二人』が多く、再置換術患者で87%、初回THA患者で74.3%、両側THA患者で90%だった。家族の類型は『パートナー(配偶者)』が最も多かった。家族の人員が多人数の『三世

帯同居』は、初回 THA を受けた患者に多かった。

家事活動を自分自身で行っている患者の割合は、再置換術患者 76.2% (16 名)・初回 THA 患者 86% (37 名)・両側 THA 患者 87% (20 名)であり、女性の患者に多かった。「パートナーすべて家事活動を行っている」に回答したのは、すべて男性患者だった。ヘルパーに家事を依頼している患者は初回 THA の患者 1 名(2.4%)のみで、再置換術・両側 THA 患者にはいなかった。

住宅に手すりを取り付けているのは、再置換術を受けた患者に多かった。しかし「借家である」といった住宅事情から取り付けることのできない患者もいた。取り付けた場所は『トイレ』『風呂場』が多かった。再置換術患者の中には、『廊下』に手すりを取り付けた患者がいた。

食事には高い椅子を使用し、休息時はベッドを使用している患者がいた。排泄では、「和式便器(蹲踞)」は初回 THA 患者の 1 名のみで、他のすべての患者は「洋式便器(椅子座)」だった。入浴時では、「介護用椅子」使用をしている患者の割合は 50%以下だった。しかし、退院後に「介護用椅子」を購入しても、住宅事情から浴用椅子使用に変更した患者もいた。就寝時にベッドを使用している患者の割合は高かったが、ベッドを置くスペースがないといった住宅事情から布団(畳上)を使用している患者もいた。

再置換術を受けた患者は「立ち上がる」「座る」「持ち上げる」「拾い上げる」「転倒」に対する意識の程度は、他の術式の患者に比べて高かった。特に「転倒」に対する意識の程度は高かった。しかし過去において「転倒経験がある」への回答率も高かった。

再置換術を受けた患者には BMI 平均値が他の術式患者に比べて高く、最高値は 36.4 kg/m² であり、「体重増加」に対する意識の

程度は低かった。

3) 記入式疾患特異的 QOL 尺度 Oxford Hip Score (OHS) 日本語版

再置換術を受けた患者では、「突然のひどい痛み」、「体をあらうこと」に対する QOL 評価は高かった。日常生活では「一人で買い物できた」や「階段を昇ること」に対する QOL 評価は低かった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

山本多香子、山田豊子：人工股関節再置換術を受けた人の生活状況調査、第 39 回日本看護研究学会学術集会、2013/8/23、秋田県民会館

山本多香子、山田豊子：人工股関節再置換術を受けた患者の痛みに関する調査、第 13 回日本運動器看護学会学術集会、2013/6/9、横浜はまぎんホール

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

山本 多香子 (TAKAKO YAMAMOTO)

近大姫路大学・看護学部・准教授

研究者番号：50442257

(2)研究分担者

山田 豊子 (TOYOKO YAMADA)

中京学院大学・看護学部・教授

研究者番号：40321054

(3)連携研究分担者

研究者番号：